



京都岡崎の北側の丸太町通りには、本願寺岡崎別院と岡崎神社が仲良く並んでいる。お寺はいうまでもなく人の最後のお祭りを行う場所で、神社は人として生まれて最初のお宮参りというお祭りをする、いやその前に子供を作る作業の儀式として結婚式を挙げる場所でもある。

ところが世の中皮肉なもので、同じ日の同じ時間に結婚式とお葬式が行われる場合もままあり、神社には紅白の天幕が、お寺には白黒の天幕が張られている。この天幕と天幕の間に幅2メートルばかりの路地があり、その先光明寺（黒谷）の広大の墓地となっている。

この辺りは、人家も少なく特に深夜には人影一つもないが通る空車のタクシーはなぜか徐行して走っている。東山タクシーの運転手、山中一郎はこの場所では何回もおいしい客を拾っている。タクシー運転手が喜ぶおいしい客とは、3～4人が相乗りして近い順番に降ろして行く長距離客が一番だが、ところがこの不景気では酔客がホステスを家まで送るエエカッコ紳士も滅多にない、ところが相変わらず続いているのは不倫のカップルで先に女を送りそして男を妻子の待つ自宅へ送っていくパターンが最近では唯一のドル箱になっていた。

山中一郎は今日も人影もない岡崎神社の前をゆっくり走り目を皿のようにして街路樹からわずかに見える影を捜した。タクシーは平安神宮の裏側にかかる昼間の平安神宮は朱塗りの上、内外の観光客で活気があるが裏側とはどんな世界でも寂しいもので観光客もここが平安神宮であることを言わなければ誰も気づかない。その長い塀の中程まで走ると大きな銀杏の木の陰から手を控えめに挙げているのが見えた。

やはりアベックだった！男が先に乗り女が後に乗った瞬間心の中で、

「やった不倫長距離客、ゲット！」

自動ドアを閉めたその瞬間、シャンプー、いや違う不倫独特の男と女の交じり合った後の「不倫の匂い」がした。そしてフロントガラスがダッシュボードから約2～3センチ上まで曇りすぐに消えた。

男は行き先を小さな声で告げる、

「24号線の桃山で一人降ります。後は城陽の寺田まで」

ベテラン運転手の山中は丁寧に「ありがとうございます」と礼を述べてから心の中で、ここから寺田までなら深夜メーターでは1万円近くにはなるだろう、やっと今日のノルマが達成できて家に帰り発泡酒が飲める、ラッキーと思っていた。

男は50歳を少し超えたころ、女は22～3歳ぐらいか？。不倫のホテル帰りには絶対間違いはない、しかもまだ不倫して日が浅いか、絶対にバレてはいけない事情が人より強いと山中は読んだ。

その理由は乗車した場所がラブホテル街から少し離れていることだ、そのラブホテル街は平安神宮から東へ行き、細い路地の奥にある。普通のカップルや水商売の人達は堂々とタクシーを無線で呼ぶ。そして少し遠慮気味なカ

ップルは二条通りや岡崎道でタクシーを拾う。不倫のカップルは暗い路地を北へ歩き丸太町通りで普通の市民のような顔をしてタクシーを拾うが、今乗っているこのカップルはさらに西へ歩き

、空車が来ても合図をしない、それは後ろから走ってくる自家用車までにも注意して街路樹に隠れてポツンと一台だけ走ってくる山中のタクシーを拾ったからだ。不倫カップルの作戦とベテランドライバーの作戦が見事とドッキングした成果だが勝者は山中の一本勝ちとっていだろう。

24号線を奈良方面に約20分。不倫カップルは手を握っている様子だが、口は一言も聞かないほど万全の注意をしているのだろうか？桃山に近づくと男は「次の信号を左」と指示、そして閑静な住宅街に入っていった。この高級住宅地は一軒あたりの面積が広く一つの通りに3軒ほどしか門を構えていない、普通の建売住宅なら5～6軒手前でタクシーを降りられてもし忘れ物をされても届けられないほど分からないものだが、この場合は少し家の手前で降りられても容易に女の家が判断できた。

男はJR寺田駅すぐ近くのマンションの前で降りたが、不倫のための経費がかかるのかそれとも元々ケチなのか会社のタクシーチケットで運賃を支払った。そのチケットには会社のゴム印が押されている、そこには京洛信用金庫総務部、おまけに使用者蘭には認印で「吉本」と押されている。

山中が時計を見ると午前1時になっていた。これから祇園の戻ってもまた最低でも2時間は客待ちをしなければならないから今日はもうやめようと帰り道桃山までくると気が変わり信号を右折してさっき降ろした不倫の片割れの女の家の前で停まった。

大きな門柱があり大理石の表札には「奥川」とある。この山中の家もかつては表札には家族全員の名前が書いてある家と、この豪邸のように姓だけ書いてある家がある、これは山中の偏見だが貧乏人の家は先で後ろは金持ちだろうと考えていた。

なにはともあれ京洛信用金庫総務部の吉本さんと、若くて色白のスタイル抜群で髪の長い超美人のお金持ちのお嬢さんの奥川さんが不倫していることは状況証拠から見て事実と確信を持った山中は会社に帰り明日から6日間の有給休暇届けを提出した。

次の日、昼前に目覚めた山中はNTTのタウンページから京洛信用金庫を捜した。四条にある本店から各支店、計算センターまで入れると半ページすべてが埋まるほどだ。不倫の男の吉本は本店勤務には間違いはない、支店発行のタクシーチケットには「らくしん〇〇支店」のゴム印が押され、本店発行のチケットには「京洛信用金庫〇〇部」のゴム印が押されていることを経験から知っている。

問題は女の身元だ、山中の勤では同じ京洛信用金庫に勤めていると思うが本店では女性だけでも何百名も働いているだろう、8階建ての本社ビルに入れるのは一階のフロントロビーだけで、それも運よく奥川が窓口係りなら簡単だがそうは上手くいかないだろう。そこでこの不倫カップルはなぜラブホテルを岡崎に選んだのかを考えた。

本店がある四条から南に二人の家がありながら本店よりかなり北のホテルを利用するのは女がこの岡崎よりも北の支店に勤めている可能性が大だ。そこでタウンページから市内北部の支店をピックアップしたが、これも無理だと考えた、21店舗もあり1軒1軒窓口に行くのも大変だしその上店内にはビデオカメラもある、運よく見つけられたとして山中の顔を見られればパーフ

エクトにはならないなどと考えている内に有給休暇の一日目は終わった。

次の日、午前7時には山中は近鉄電車丹波橋駅の東口に立っていた。ここから東にゆるい上り坂になっている。24号線の信号をさらに東に行くと不倫の女奥川の豪邸がある、電車通勤しているとなると駅はここしかないからだ。山中の手には近鉄経由市営地下鉄宝ヶ池までの切符が握られている。山中の頭には1、色白 2、背が高い 3、美人で髪が長い、バックミラーから見た一瞬の記憶がプッシュされているが、不特定多数の中から選べるほどの自信がない、とえあえず東から歩いて来る超美人をストーカーしてその女がどっかの「らくしん〇〇支店」に入った時に初めてその女が吉本との不倫の片割れの奥川になるのだ。

2話につづく～全6話

明美..... 1話(全5話)

無線配車で銀閣寺のアパート「銀閣ハイツ」101号室と指示を受けたタクシー運転手はそのアパートの前で客の出てくるのを待っていた。この客は学生で、月・水・金と京都最大の歓楽街祇園の富永町のスナックでアルバイトをしている。

出勤は午後8時なのかいつも7時30分ごろ、この運転手のタクシー会社に電話をしてそれを無線オペレーターが配車をする、この日この無線を取ったのは前川克己30歳の独身で会社の寮に住んでいる。

女はすぐに出てきた。背が高く、長い黒髪に白い顔は清楚でまだ幼さが残っている。その姿は大学生そのもので水商売でホステスをしているとはどこから見ても見えない。女はドアに鍵を掛け、その鍵を左手にあるガスや水道のメーターボックスのどこかに隠している。

この女を花見小路で降ろして空車で街を流していると中年の女性が前川のタクシーを拾った。行き先は銀閣寺だった。京都では銀閣寺といっても観光寺院の銀閣寺というお寺ではなくその銀閣寺がある地域のことをいうのだ。これは金閣寺も東福寺もそういうことになるが、地方からきた運転手は「金閣寺」といわれて正直に金閣寺の山門に着けたら客から怒られたという笑い話もある。

前川はその銀閣寺で客を降ろしたのだが、その目の前にはさっき乗せた大学生のアパートがあった。前川は客の部屋を探している振りをしながら101号室のメーターボックスを開けた。部屋の鍵はガスメーターの上においてあり、それを持って合鍵を作りに行った。そして本物の鍵を元通りに返し、作ったばかりの鍵で部屋の中に入った。

部屋は2DK、一つ目の部屋にはホームゴタツが置かれている。コタツの上には学生らしく本が数冊、ノートもペンもきちんと整理されている。学生手帳を発見して中を見ると、京都外国語大学英文科、年は21歳、名前は氷川明美。アドレスを見ると実家らしい埼玉県の局番が並び、次に京都市内の番号が並んでいる。

どれも男性らしきものはなく京都市内の番号には本人と12名の氏名、アルバイト先のスナック「花まんま」の電話番号もあった。前川は電話の横にあったメモ用紙にすべて書いていた。

奥の部屋には、ピンクのカバーのシングルベッドがあり、洋服ダンスと整理ダンスがあった。洋服ダンスを開けるとスナックに着ていくのか少し派手目の服があり、その下にはアルバムがあった。アルバムには大学入学から今までのスキー、海水浴、テニスなどを楽しんでいる写真はあがるが男とのツーショット写真はなく、どれも女友達ばかりで前川はあんな可愛い顔をして彼氏の一人もいないのかと不思議におもっていた。

整理ダンスの一番上を開けるとそこには下着がはいって綺麗に整理されている。前川はそれが妙に生々しくて手で触れようとしたがバレたらやばいと思いやめている。二番目の引き出しを開けるとセーターなどが入っていた。そしてその奥には紙の箱が見えるが...なにかと思ってその箱をベッドの上に置いて開けた瞬間、前川の心臓が止まると思うほど「ドキッ！」としていた。

。

そこには太い肌色をしたグロテスクなペニスがあった。それも直径4、5センチ×20センチ

ほどで外国のポルノ男優よりも太くて長かった。その立派なペニスのスイッチを入れるとクネクネ回り、それにバイブレーター機能で亀頭部分が小刻みに強く動いていた。

そしてその箱の中には封を切った1ダース入りのコンドームが後3個残っていた。さっきは純情で男の気もないとおもっていたが、これを見つけてからは「スゲエ〜」女だと思っていた。前川は尿意をもよおしトイレに行くと、バスの横にある洗濯機を見つけた。洗濯機の中に手を入れてバジヤマやタオルの下からパンティーを3枚見つけ出した。そしてその中で一番汚れているパンティーの秘部にあたる部分に前川のギンギンにいきり起った太いペニスを擦り付けていた。

そしてパンティーをペニスに巻きつけて右手でゴシゴシしごいていたが、それは1分も待たずして暴発していた。白い液体はパンティー薄茶色の染みと合体して一つになっている。前川は残りの2枚のパンティーにもキスをしてまた元通りに洗濯機の中に戻っていた。

前川はこれで満足をしたのかベッドに座りタバコを吸おうと灰皿を探したがなかった、そこでキッチンに灰を水で流して吸殻はティッシュに包んでポケットにいれていた。それからベッドの皺を丁寧に直して部屋に証拠を残していないかを確認して電気を消して立ち去っていった。

2話につづく(全5話)

真弓..... 1話(全6話)

身長150センチ、体重35キロの小柄な女が2DKのマンションのベッドの上で直径5、5センチ、長さ25センチのコケシ人形にコンドームを被せ、ゼリーをたっぷり塗って仰向けに寝ている。

そのコケシを右手に持って右足太股の下から秘部に入れようとしている。コケシの丸くなった頭の部分を穴にあてがいクルクル回すとゼリーと愛液でヌルヌルして気持ちがいいが、それ以上には押しも引いても奥へとは進まない。今度は左手にコケシを持ち替えてベッドの上に立てて腰をかがめて無理矢理力まかせに入れようとしたが、痛いばかりで先チョッ！も入らない。

今までのそれこそ血が出るほどの訓練で4、5センチまでの大人のおもちゃの電動ペニスの挿入には成功しているが、この1センチの大きさには苦戦をしていた。

この女は京都祇園の「スナック・愛」のホステスで本名は落合真弓、源氏名も真弓と名乗っていた。真弓は小柄な身体で小さな顔は白くて目がパッチリ、フランス人とのハーフといっても誰もが信用するほど可愛かった。

真弓はこの「スナック・愛」の常連客の高木一豊が大好きで結婚まで考えていた。一豊は一流商社の課長でいつも部下の2～3名と楽しく飲み、歌いそして毎回現金で支払っていたから愛ママもこのメンバーには最高のサービスをしていた。

真弓はこの一豊に積極的に接して一豊に愛を告白して交際を申し込んでいたが、一豊はニコニコするばかりで相手にはしてくれなかった。一豊は33歳で2年前に見合いで結婚をしているがまだ子供はいない。部下の独身のサラリーマンは真弓が一豊のことが好きなことを知っているので色々冷やかしている。

「真弓、課長をなんぼ好きになっても、その小さな身体では無理無理！」

「あら？私の身体のどこが？背は小さいけれど～出ているところはでています」と胸を両手で抱えて笑っている。

「違う違う、課長のアレは馬並みで異常に大きいのや！直径5、5センチ、チン長は25センチや、今まで30数回お見合いをしてやっと今の奥さんを見つけたんや～真弓、あきらめな！」

「一豊さん、本当にそんなに大きいの？」

「真弓、大きいだけで何の取り得もないの俺の息子は！」

一豊の恋愛や結婚の条件は色々あったが、30歳を過ぎたころから条件はたった一つになった。それはこの巨大なペニスを受け入れる女だけだ！たしかに子供を2～3人産んでいてある程度s年を取ってれば受け入れてくれる女を探すのはたやすいが、現にこのスナックの愛子ママとは3回ほど寝てはいる。しかし、それは愛子の興味本位のセックスで愛などはなかった、それも3回もすれば巨大だけのペニスでは飽きてしまうものらしい...。玄人の熟女なら喜んではもらえるがやっぱり嫁ともなると素人になりそうすれば一豊のペニスは受け入れてはもらえないことになる。

一豊の妻、里子は33歳で172センチ、73キロの大柄、32歳まで恋愛もせずOLをしていた。それまでには男と肉体関係もなく処女で一豊と結ばれていた。見合いの夜にシティーホテ

ルに泊まりもし無事にペニスが入れば結婚するという仲人了解の元でセックスを試していた。

この二人のセックスでは一豊のペニスはなんとか半分ほど入り半分は外にでていたが、それでも太さには努力すれば対応できると信じて話はトントン進み華燭の宴が一流ホテルで行われていた。

ここまでの話を一気に一豊は真弓におもしろおかしく聞かしていた。真弓は笑い転げながらも...「それで？」さらに一豊も、

「それがこの嫁の里子は若い時からオナニーも経験がなくてなかなか濡れてくれない。そこで唾をつけて入れるが、入れば入ったでピストン運動をすればきっちりハマっているのか妻の73キロの肉体ごとついてくる。夫婦一対というのかそら～格闘技になってしまう...ベッドも二回つぶした！」

「そ、それで...」

「それで...やむなく妻の両手にローションを塗りペニスをしごいてもらっている」

「へえ～それで奥さん、それで我慢しているの？」

「それがこの里子は、古い考えの持ち主で一度嫁いだら何があっても我慢するといってくれている」

「そう～でも奥さんも少し訓練すればいいのに～私ならなんとか努力して一豊さんを受け入れるのに～」

「ありがとう、真弓...でも～それは無理無理！その小さな身体では！」

「一豊さん、私、今夜から訓練しますから、もしその～ペニスが入ったら私を抱いていただけますか？」

「そらあ～俺は...前から真弓が好きだし今も好きだし願ってもないことだが...でも～他の男と訓練されたら...少しヤキモチを焼くよ！」

「ううん、私は一豊さんのもの、そう一豊の妻になります。そして奥さんの里子さんと別れてください。ううん～そのほうが里子さんの幸せになります」

とは啖呵をきったものの、真弓は一豊のペニスと同じ大きさのコケシを手に持ち毎夜の深夜の訓練にもため息をついていた。が、「女は赤ちゃんを生むのだからこんなコケシの頭ぐらいは入るはず」と執念を燃やしていた。

2話につづく(全6話)

梨香..... 1話(全6話)

4月に入ると大学生の新入生の歓迎コンパが祇園や木屋町の繁華街で行われる。その多くは安い居酒屋チェーン店でこの時期どこの店でもコンパの予約が殺到して学生の街夜の京都の風物詩にもなっていた。

親元を離れた開放感やホームシックになって人恋しいのか新入生の学生はなにかと街にくりだしている。そこでは一気に飲みや王様ゲームを楽しんだ後は酔いつぶれる女子学生も多い。

この時期は繁華街のタクシーもこの若者たちの泥酔者を嫌っている。なれない酒を飲みタクシーの中で吐き！その上意識不明になり病院に送るが運賃はもらえないし時間もかかるからだ。学生もそのことを知っているから泥酔者をビルの陰に隠し酔っていない学生が手を挙げてタクシーを止めるが、それに気がついた運転手はドアをボタンと閉めて急発進でよく逃げている。それからは学生も学習効果を発揮して1人が先にタクシー乗り込み、それから仲間を呼びその泥酔者を連れてくる方法をあみ出しているからさすが学生アップレと言うしかない。

タクシー運転手福井慶三は祇園から木屋町を今日も流していた。すると若い学生風の女が手を挙げて合図をしている、タクシーは左にウインカーを出して止まった。女が乗ってドアを閉めようとする、

「すみません、もう1人乗ります」

その女がタクシーに乗ると同時に男3人に抱えられた意識不明の女子学生を発見して運転手は「ヤバイ！」逃げようとするが先に乗った女は後部座席に深く座っていた。それでやむを得ず福井は意識不明の女ともう1人を乗せて伏見区藤森にある京都教育大学の近くのワンルームマンションまで送っていた。

運転手は、

「この娘は何階？」

「はい、すみません...4階なんですけど...このマンションはエレベーターが...」

福井は黙ってその意識のない女を抱っこして階段を一步一步上がっている。右手はセーターの上からだがオッパイにある、その左胸の膨らみと温かみが福井の脳に伝達されて脳は福井のペニスに血を静かに送っていた。

部屋の前ではその娘を一旦座らしてGパンのポケットに手をいれて鍵を探した。ポケットの中は窮屈で太股と足の付け根の部分に鍵はあったがこの時の恥丘の感触がこれまた福井の脳を刺激していた。

部屋は細長いワンルームマンションで窓が一つ、そこのシングルベッドにその娘を寝かした。その娘の顔はまだ幼くて白い顔とショートヘアーがよく似合い可愛いかった！福井は付き添いの女に、

「規則正しい寝息をしているからこのまま寝かして置いても心配がない」

「運転手さん、ありがとうございました」

「いえ！この時期はこんなのが多いから...で、あなたはどうしますか？」

「はい、私も家に帰ります。桃山なので送ってください」

福井はわざわざ娘の鍵をテーブルの上に音を立てて置き、その娘を先に部屋から出して内側からロックする振りをしてドアを閉めた。

「運転手さん、やさしい方でよかった！」

「君たちは京都教育大学の学生？」

「はい、私は千恵美といいます、二年ですが、あの娘は梨香という新入生です。私も梨香も山口県から京都にあこがれてきました」

福井のタクシーは桃山で千恵美を降ろしてから梨香のマンションに向かうがその途中コンビニに寄りガムテープと使い捨てカメラを買っていた。福井は梨香のマンションの玄関にタクシーを止め急いで階段を駆け上がっていた。部屋の電気を点けると梨香はすやすや寝息をたてている。その梨香の両手を頭の上で合わせガムテープでグルグル巻きにして口にも張った。

セーターを捲り上げてブラジャーをはずしてGパンをずり下してから横に添い寝をするような状態でパンティーの上から恥丘をなぜ回して左のオッパイを吸ったところで梨香が目を覚ました。梨香は、

「ウウウッ！」

といいながら足をバタバタさせて抵抗をしている、福井は耳元で、

「なにも怖いことはあらへん、しばらく静かにしていたら命はとらないから安心したらいい、わかった梨香ちゃん」

梨香は黙って「コクン」うなずいていた。

2話につづく(全6話)

.....

☆～大根小説作家、音川伊奈利の短編10連発は、

<http://p.booklog.jp/book/17872>

天使の恋～美雪...早苗...香奈～3名の恋の物語

<http://p.booklog.jp/book/18492>

老人と性「京都タクシードライバー・さくら」...短編小説13話

<http://p.booklog.jp/book/18483>

★～私の小説で自己破産をテーマにしているのがあります。これは主人公を女性にしていますから少しH系ですが、自己破産までの流れが書いてありますから参考になります。とりあえずは裁判所に走りこめば今月からの返済はストップできますから自殺というような最悪のことはなくなります。ぜひ、読んでください。

長編小説「京都フラワーランジェリー物語」

<http://p.booklog.jp/book/16636>

